

1/2000都市模型の活用事例

まちづくりワークショップ

都市模型は、専門家ではない方々でもまちの把握が容易にでき、また複数人数が同時に様々な視点で眺めることで活発に意見交換ができるため、住民参加のまちづくりワークショップで活用できます。

森ビルは、平成30年度内閣府地方創生推進事務局委託事業 都市再生「見える化」模型シミュレーションに向けた技術開発調査を受託し、まちづくりを検討するツールとして1/2000都市模型を提案・制作し、福岡県北九州市八幡東区にてワークショップを実施、その効果を検証しました。

ワークショップにおける1/2000都市模型の利用方法を紹介します。

▶ 福岡県北九州市 2050年の八幡東区をカタチにするワークショップ



目的

北九州市八幡東区において2050年に向けた持続可能なまちづくりを目指すため、基本的な理論となる「ストック型社会論」を学び、将来のまちの姿の素案を制作する

参加者

北九州市八幡東区およびその周辺に住む10代から70代までの男女約20名

内容

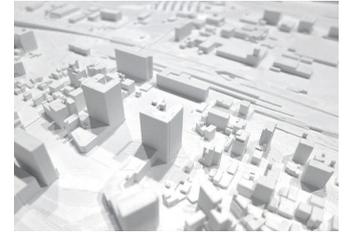
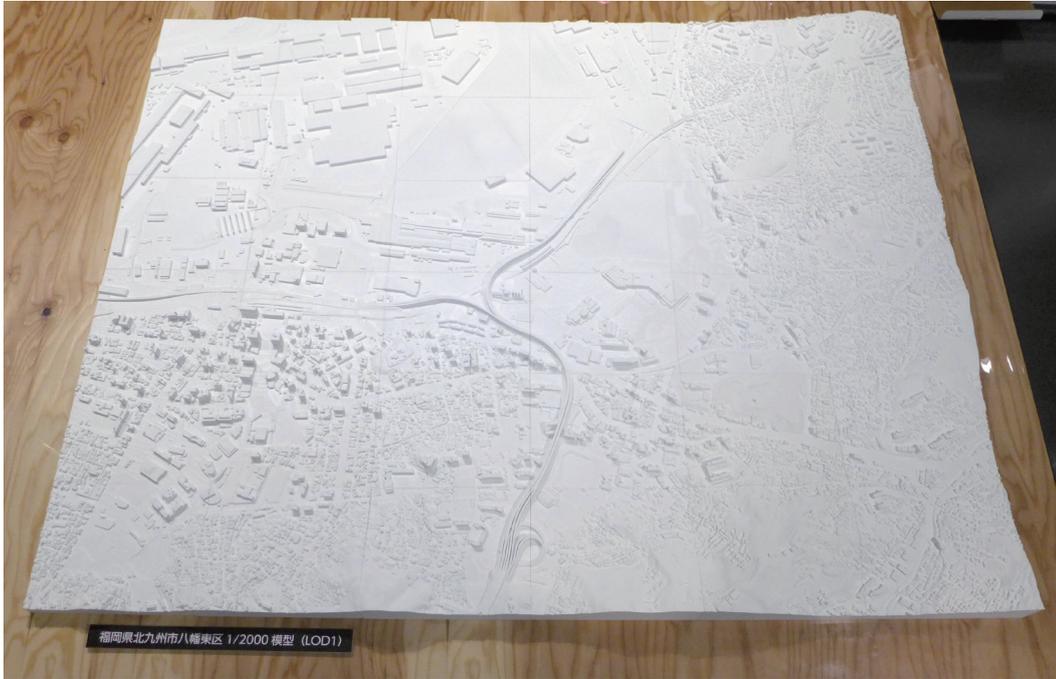
※講義・発表は全員共通、ワークは対象地域ごとに3グループに分かれて実施

- | | |
|-----|---|
| 第一回 | <ul style="list-style-type: none">● 持続可能なまちづくりのために必要な考え方（ストック型社会論）講義 講義● 地域の現状を知るための都市模型を使ったワーク ワーク 発表● 2050年の未来を思い描くワーク ワーク 発表 |
| 第二回 | <ul style="list-style-type: none">● 都市模型に様々な情報を投影し、地域の現状および成り行きに任せた場合の将来の状況について確認 講義● 対象地域の2050年の理想的な姿を話し合い、将来像のラフ案を作成 ワーク 発表 |
| 第三回 | <ul style="list-style-type: none">● 将来像のラフ案を3Dプリンタで造形した都市模型に彩色するワーク ワーク● 発表会に向けたコンセプトまとめ ワーク |
| 発表会 | <ul style="list-style-type: none">● ワークショップの趣旨説明（ストック型社会への転換の必要性） 講義● ストック型社会論の啓発アニメーション上映 講義● 3回のワークショップを通して導き出した将来のまちの姿の素案をプレゼンテーション形式で発表 発表● 北九州市副市長からの講評 <p>※ワークショップ参加者のほか、地域住民や自治体関係者約80名が参加</p> |

まずはまちの現状把握から

都市模型を使ってまち全体の現状把握

まち全体を眺めることで、まずは参加者全員でまちの現状を把握しました。
地図を見ているだけでは気づけない地域の高低差や、斜面地に住宅が密集している様子が理解しやすく、地域の課題発見や意見交換の促進に役立ちました。



八幡駅前

縮尺：1/2000

範囲：約9km²(約3km×3km)
2分の1地域メッシュ
(約0.5km×0.5km)単位

模型サイズ：約1.5m×1.5m



2分の1地域メッシュ単位で制作しているため、取り外しや入れ替えが容易にできる



都市模型を見ながらまちの現状について意見交換する参加者



参加者の声

- 可視化することで地図では分からない高低差や地形が分かりやすく、現状を把握しやすかった。(30代男性)
- 地形の表現が細かく、平面より立体の方がまちの状況(建物密集具合や未利用地の多さ等)が分かりやすかった。(50代女性)
- 八幡東区全体のまちの特徴が理解できた。(70代男性)

模型 + 都市情報でより深く

都市情報を参考にしながら将来像を検討

まちをより深く理解するために、さらに地区にフォーカスし、プロジェクタを使って模型に都市情報を投影しました。様々な統計データを都市模型と連動することにより、都市構造の現状や課題を視覚的、直感的に把握することに役立ちました。

それにより、地域が抱える問題解決に向けて、より現実的な将来像を話し合うことができました。



都市情報を参照しながら理想の将来像を話し合う

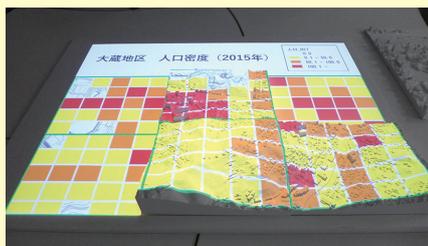


情報が都市模型に投影された様子

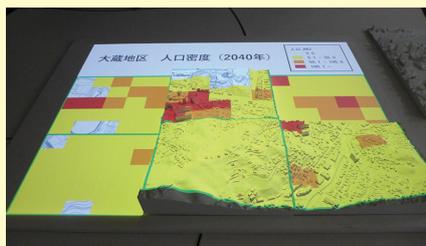


三脚にセットしたプロジェクタを使って上部から模型に映像を投影

● 投影した情報（抜粋）



2015年の人口密度



2040年の人口密度



ハザードエリア



2015年の空家率



2040年の空家率



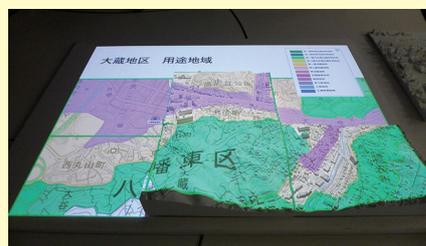
交通ネットワーク



2010年の維持管理費



2040年の維持管理費



用途地域図

参加者の声

- 立体的なイメージにより状況がより深く理解ができた。(10代女性)
- まちや地域の活性化を考えるうえで課題がイメージしやすかった。(30代男性)
- 実生活に即した想像ができた。(50代女性)
- ハザードエリアは、地形と組み合わせることでより現実感を持って把握できた。(30代男性)

模型により生まれる発想

将来像をカタチにする

①

平面の地図にブロックを置きながら、話し合いにより描いた将来像をカタチにしていきました。



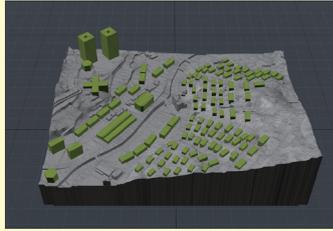
③

参加者は模型に彩色しながら、道路、緑地、河川、住宅等のゾーニングを再確認。作業の中で更にアイデアを膨らませ、コンセプトをまとめていきました。



②

森ビルは、そのラフ案を元に3Dデータを立ち上げ、3Dプリンタで造形した模型を用意しました。



④

彩色した模型を、まち全体の模型の中に現況と置き換えて反映し、まち全体において調和がとれた将来像になっているか等を全員で評価しました。



模型を使ったワークは、新しい発想が生まれたり意見交換が活発化する等、大きな効果がありました。



ブロックを使ってアイデアをカタチにしてい



将来像の都市模型に彩色



将来像を反映した模型を俯瞰しながら意見交換



参加者の声

- 模型に彩色しながら視覚的にまちづくりを考えることができた。(30代男性)
- 平面での話し合いが立体的でリアルな模型となり、より一層具体的な将来像を考える機会になった。(50代男性)



ワークショップを見学した自治体の声

- ワークショップを通して幅広い年代の人が意見交換できていた。年長者の経験や知識、若者ならではの発想が融合し将来像を導けたことは、これからのまちづくりを進めて行く上で有意義だった。
- 今後はより多くの地域住民、特に学生や若年層を対象として、まちの将来を考えるワークショップを継続できると良い。

ワークショップ概要

日時	第一回	平成31年1月26日(土)10時~16時	場所	九州国際大学
	第二回	平成31年2月16日(土)10時~16時		主催
	第三回	平成31年3月 2日(土)10時~16時		
	発表会	平成31年3月16日(土)13時~16時		
共催	内閣府地方創生推進事務局、北九州市、九州国際大学、八幡東アカデミー、八幡東区自治総連合会			